

朱子の考經刊誤に就いて

著者	三井 宇一郎
雑誌名	漢文學會々報
巻	3
ページ	55-64
発行年	1935-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146671

朱子の孝經刊誤に就いて

三井宇一郎

孝經刊誤は彼の宋代の碩儒朱子が孝宗の淳熙十三年、齡五十七、華州雲臺觀を主管して居た頃の作である。自分は今此の書の如何なるものであつたか而してそれが孝經研究史上に占める意義如何に就いて卑見を述べたいと思ふ。

孝經の異本は汎く知られてゐるやうに大別して今文古文の二つとせられるが、刊誤は此の古文經に據つてゐる。其の體裁は「仲尼問居」より「患不及者未之有也」迄を經文と見一章となし以下傳文と見、十四章に分けて居る。刊誤に對する朱子の考は朱子語類、朱子學的等に散見し、又刊誤を本にした朱申の句解や江元祚の孝經大全中の刊誤原本式に依りその原形と共に窺知出来るが、その經と傳とに分けた理由は學的に

孝經只前面一段是會子關於孔子者、後面皆是後人綴輯而成

といひ、句解に所謂經文の末に付せられた語として、

此一節夫子會子問答之言、而曾氏門人所記也、疑所謂孝經者其本文止如此、其下期或者雜引傳記以釋經文、乃經之傳也と引くものに之を察せられる。而して經の部分に於ける誤として「子曰」を二、書の引用一、詩引用を四、凡て六十一字を刪り經文の舊に復せしめたとなし、之に説明を加へて、經の首めに孝の終始を統論し、中ごろには天子諸侯卿大夫士庶人の孝を陳べ、末に

自天子已下至於庶人、孝無終始、而患不及者未之有也

と結んでゐる。首尾相應脈絡貫通、一時の言であることは疑ふべからざるもので後人が妄りに六七章に分けてゐるのは間違つてゐるといつてゐる。今文の三才章の末に

此一節蓋釋以順天下之意、當爲傳之三章而今失其次矣、

といひ、更に説明して章首から「因地之義」までは左傳の子太叔が趙簡子の爲に子産の言葉をいつたものを唯禮の字を孝の字に變へたのみで文勢を見ると明らかに左傳の方が本であると思はれる。又「先王見教之可以化民」以下は上文と續かないし内容からしても理に於て悖るものがあり旁々引く所の詩も合せて六十七字を刪るべきであると述べた。又今文孝治第八章の末に

此一節釋民用和睦上下無怨之意、爲傳之四章

といひその言ふことは善いが經文の正意ではない。經は孝を以て和するが此は和を以て孝するといふのである。但し此の詩の引用は甚だしい失敗ではないからそのまゝにして置くといひ、以下聖治章第九の前半「其所囚者本也」までを傳の五章とし、孝は徳の本の章を釋いたものとなし、その嚴父配天は武王周公に就いて論じたので、若しも天子にして始めて可能な事を一般に強ひる事であるとしたならば、民の教とはならぬ筈である。又「親生之膝下」以下は意味親切なるも上文と續かぬものがあり却つて下章の意と相近い。爲に今文の方では下と合し一章となしてゐる。だが之を一章とせば下の「父子之道天性也、君臣之義也」が重複する而して今文聖治章後半章の終りに

此一節釋教之所由生之意、傳之六章也

と説明した。古文の分章では「子故曰不愛其親」以下を別章に立て、ゐるが、之は前の「子曰父子之道天性」の「子曰」に照應するから今文の「故」とのみいふに勝るも内容から見ても章の切れ目を其處に置く事は誤りである。又「君臣之義」の下に斷簡があるらしいが今は知ることが出来ぬ。悖禮以上は、格言である。「以順則逆」以下は左傳の季文子北宮文子の言を雜へ取つたもので上文と相應しないから以下九十二字を刪去するといつて聖治章に對して異常な關心を見せてゐる。尙今文紀孝行第十章の後には

此一節釋始於事親及不敢毀傷之意、乃傳之七章、亦格言也、

といひ、五刑章第十一の後には

此一節因上文不孝之云、而繫於此、乃傳八章、亦格言也

といひ、廣要道章第十二の後には

此一節釋要道之意、當爲傳之二章

と説き、但し經の要道と少しく意味が違ふといつてゐる。次に廣至德章第十三の後には

此一節釋至德以順天下之意、當爲傳之首章、

といひ至德の語意はやはり經と少し異なるものがあると述べ、今文應感章十六を以て傳の十章「釋天子之孝亦格言也」といひ、今文廣揚名章第十四を傳の十一章「釋立身揚名及士之孝」となし、古文闡門章を傳の十二章となし

此因上章三可移而言、嚴父孝也、嚴兄悌也、妻子臣妾官也

といつてゐる。今文諫爭章第十五の末には

此の章不解經、而別發一義、宜爲傳之十三章

といひ今文事君章第十七の後には

此一節釋中於事君之意、當爲傳之九章

といつて更に説明を加へ、上の争臣に因つて誤つて此にあるのである。又「進思盡忠、退思補過」も亦左傳の士貞子の言葉であるが文理に害がないし引用の詩も孝を移して君に事へるの意を發明するから之を存する。と言ひ最後の喪親章の終りに

傳之十四章、亦不解經、而別發一義、其語尤精妙也

といつてゐる。そして之に跋を附して

熹舊見衡山胡侍郎論語說、疑孝經引詩非經本文、後讀之每覺其言之有味、且又覺其所可疑者不但此也、因以書告沙隨

程丈可久、程答書曰、頃見玉山汪端明亦以此書多出後人傳會、乃知前輩讀書精審其論固已及此、而區區進越之非亦庶乎幸免矣、因悉數所疑而記二公之言、以爲質云、

(一本には可幸免矣の下、因欲掇取他書之言可發此經之旨者別爲外傳顧未敢耳淳熙丙午八月十二日記とある)

となし此書を書くに至つた動機を述べてゐる。

然しながら右の様な案は立てたが尙考ふべき幾多の問題のあることを思ひ輕々に改經の舉措を表はさずその生前に於ては之を上梓して世に問うたもので無かつたらしい。即ち現に我々の見又は常識的に考へる孝經刊誤なるものが古文今文の何れとも異なる一異本であつて、例へば一切の章名を除き經と傳とを區別し、古文經より二百三十字を刪去した而も傳の部分では從來の今古文と章句の排列を異にした一本であるが、刊誤の原形眞面目は古文孝經を底本とし、之に朱子自らの考究試案を記入したものに過ぎなかつたと想察される、その五十七歳の時刊誤を書き慶元六年七十一歳で歿するまで十五ヶ年も間があるのだが、歿後其の子から魏了翁に原稿が送られ、魏了翁の手によつて梓に上せられたと言ふ事實や、刊誤の跋に改經の罪を恐れ他書之言の此經の旨を發すべきものを編んで外傳となさうと思ふが、未だ果さずに居るといつてゐることから未定稿であることは容易に考へられることで、之に就いては既に山本北山も經義振説に詳細に説明してゐる。その要點を拾ふと

- 一、跋文に胡、汪二氏に託して改經の事を遠慮深く述べてゐること
- 二、外傳の作が未だ出來ぬと云つてゐること
- 三、大學中庸章句は時々改訂を加へ漸く心に愜ふに至つて序を書いたものに見れば刊誤に序の無い事は未定稿であることの傍證となる

四、刊誤を作つた翌年小學の編纂に際し、その中に「孔子曰」として孝經の所謂經を引くもの一、傳を引くもの三、「孝經曰」とも「孔子曰」ともいはずに所謂傳文より引くもの二、之によつて孝經に對する疑の程度が察せられる

といふ様の事どもである。此等からして以上の所説が理由づけられるやうに思ふ。

以上刊誤がどんなものであつたかを略説したのであるが、朱子自身も満足出来なかつたもの丈にかなり批判の餘地はあるやうに思ふ。今之を左の諸點から眺めて之に批判を加へて見たい。

一、底本として古文經をとつた態度について。

朱子が何故古文をとつたかといふことに就いては少しくその前代からの孝經研究の足跡を見なければならぬのであるが、直接にはどうしても宋の仁宗の時に司馬溫公が孝經指解を作り、皇祐年間に祕閣に献じてゐるが此の指解が古文經をとつた事から影響されてゐると思ふ。指解の序に、先儒は皆孔氏が秦禁を避けて書を壁藏したと云ふけれども自分はさうでないと思ふ。秦の頃までには古文科斗の文字といふものは既に早く亡くなつて居たのである。又禁書の令は始皇の三十四年に下されたもので、漢の興る前僅かに七年である。だから孔氏の子孫が皆壁藏のことを知らなかつた、そして魯の共王が宅を毀したので始めて出て來たなどは考へられない事である。つまり科斗の書が出て來たからには始めて壁藏したのは、さうつと以前孔子を矩る遠くない時代と見なければならぬ。従つて轉々傳授の今文經よりは原形に近いものと見るべきである。且つ一所に出た古文尙書は皆信するのに孝經を信じないといふのも變な理窟である。古文孝經の方の正しいことは疑を容れないといふ意味の事を述べてゐる。

元來今古文の問題は唐の玄宗の開元七年三月勅命により多くの儒者が二つに分れてその是非を論じたのであつたが、結局孰れを可とも決定されずに了つたのであるが、此書が教化の上に重大な意義を持つものである所からその後三年を経て開元十年六月玄宗皇帝自ら之に注して天下一般並びに國子學に頒布し、天寶二年五月に至り重ねて注を作り前注を改めた。之が同四年九月に石に刻まれ所謂石臺孝經といふ一定本となつたわけである。玄宗の據つたのは今文經であつて元行沖に疏を作らしめたが從來の鄭、孔二家を始め諸注の異色あるものは此の疏の中にとられ、爾後御注孝經が獨り行はれる様になつたものらしい。そして之が宋代になつて眞宗の咸平二年に邢昺が勅命によつて正義を作つた際、元行沖のものが殆んど

そのまゝ採られて邢昺その人の意見と全く區別出来ない様になつてゐるのが現在の十三經注疏中のものである。ともあれ玄宗御注邢昺の疏の完成は從來の孝經研究の集大成で立派な定本が出来たわけであつたが、半面この爲に從來の諸家注本が廢絶するといふことにもなつたわけである。

孝經指解は前述の様な考を以て此の様な歴史の下に生れ出たもので、指解の序にある様に當時の祕閣には鄭氏注本と明皇御注本と三種が藏されてゐたのであるが、古文は經のみで注がなかつたので殆んど今文の注である御注を採り間々自己の意見を加へて注を作り祕閣に獻じたわけである。朱子が此の指解の説をとつて古文を底本としたことは吳澄の門人張恒が師の校定孝經の跋を書いてゐるがその中に師の言として

司馬溫公有古文孝經指解、蓋溫公資質重厚、於孝經、今文尙且篤信、則謂古文尤可尊也、而不疑後出之僞、朱子識見高明、孝經出於漢初者尙且致疑、則其出於隋世者何足深辨也、而刊誤姑據溫公所注之本、非以古文優於今文而承用之也と引いてゐる。之は吳澄が朱子の古文經をとつたことに對して嫌らざるものがある爲の曲説ではない様で、たゞ暫らく溫公の本をとつたといふのが眞實であらうと思ふ。といふのは朱子の問題とする所は、今古文の問題を離れて孝經そのものが果して信ぜらるべきか否かといふ全く異つた所に目標を置いたのであるから、いはゞ今文經にないものも古文には有るからといふ單純な理由でもあつたかも知れない。朱子語類の葉賀孫記に

古文孝經有不似今文順者如父母生之續莫大焉、又著一個子曰字、方說不愛其親而愛他人者謂之悖德、此本是一段以子
曰分爲二、恐不是

とあつて今文を稱へてゐる事などから見れば必ずしも古文でなければならぬといふ態度ではなかつたらしい。黃震の日抄に古今文派を分けて争ふことの愚を笑つてゐる態度と朱子の古文をとつた態度とは通ふものがあると思ふのである。

けれどもどうしても此の態度は學問の世界に於ては不徹底の非難を免れない。元に至つて吳澄が孝經の定本一卷を作らねばなかつた理由はそこにあると思ふ。その書の題辭にその意圖が知られるのであるが

夫子遺言惟大學論語中庸孟子所述醇而不雜、此外、傳記諸書所載眞僞混淆殆難盡信、孝經亦其一也

といひ朱子の據つた古文は隋の劉炫の得た僞經であり邢疏を見ても其の事は審である。而してそれかといつて今文も亦信が置けぬ。故に自分は疑を去り信をとるといふ立場で特に刊誤に因つて今文古文の同異を校訂し此の本を定め後の君子を俟つと結んでゐる。

つまり朱子の古文をとつた態度については吳草廬の校定古今文孝經定本の出現が立派な批判になつてゐると思ふのである。

二、外傳の製作のなかつたことに就いて

朱子自身でも左傳にのみよつて孝經を疑ふことの不安を感じたから、廣く諸書の孝經の内容と、或はその形式と、相渉るものを究め確固不動の根底の下に孝經を批判し解剖したいといふことは、十分氣が付いてゐたので、前掲のやうに刊誤書後に明瞭に之を述べてゐる。

そして朱子の果し得なかつた所謂外傳はその高弟でありその女婿でもある黃幹によつて成されたといはれる。即ち黃幹は詩書其の他孝を言ふものを集めて二十四篇となし名づけて「孝經本旨」となしたとあるが自分は未だ見てゐない。更に此種のもは明代になつて朱鴻の四書孝語、五經孝語、虞淳熙の孝經集靈、黃道周の孝經集傳などで、集傳は主として禮記によつて考へてゐる。清朝の丁晏の孝經徵文も同様の意味を持つたもので孝經の基礎研究の一分野を開拓してゐるものである。

三、經傳を分けたことに就いて

成程朱子の立てた經の文の首尾は相應じて一人一時の作のやうに考へられる。然し乍ら三才章以下を以て皆傳としなければならぬ理由は尙薄弱である。

胡宏や汪應辰に暗示を受け左傳を以て孝經を疑つて來たが、そして姚際恒の古今僞書考などでは更に此の論を進めて左傳は漢代になつて世に出たから孝經はどうしても漢代の僞作でなければならぬといつてゐる。かく左傳を立て、孝經を採

らぬ事に一應の理由は認めるのであるが、自分は清朝の簡朝亮の孝經集注述疏にいふ如く、孝經以前、左傳以前の語を二者必要に應じて引いたと見る理由もあると思ふものである。即ち

或曰、若今文孝經、殆後人爲之、而襲左傳者歟、非也、漢蔡邕明堂論、引魏文侯孝經傳曰、大學者中學、明堂之位也、夫魏文侯非師子夏者乎、呂氏春秋察微篇引孝經諸侯章、則先秦古書也、其有與左傳同者、則述古之公言、而非襲也、

猶論語答顏淵仲弓之間仁與左傳亦同也、

といつてゐるのを考へたい。孝經全部が孔子の言であるといふことは斷定出來ぬし、文の雅潤に於て論語などの趣がないし、作者を考へてはどうしても孔子でも曾子でもないと思へられるから、孔子の言といつて孝經に引用したものも編纂者が聞き歪めてゐるものもあらうし、事實他人の言であるのに孔子の言だと誤傳されたものもあらうし、且つ又現代我々の見る孝經が屢々隱顯の歴史を辿つて漸く今日に至つてゐる所を以て見るも傳承の間に錯簡が生じ、他よりの雜入がなかつたとはどうしても考へられないから文が渾然として居ないことは認めなければならぬ。さりとして一部分のみが他書と直接に關係がないから孔子曾子に直接關係あるのはそこ丈だといふことはどうかと思ふ。

朱子の所謂經文中の五つの階級によつて孝を説いた部分などは實踐道德として殆んど無意味で、その説き方も各階級の差別のある程に適切な言葉で孝の仕方に差別をつけられてゐない。いはゞ本來階級によつて差別のない孝のやり方に強ひて差別をつけて見たといふ感じのする文であることは既に指摘されてゐる所である。(津田博士の儒教の實踐道德なる論文に於て)又傳の中でも決して輕々に出來ない章のあることは朱子自身でもよく知悉してゐたのである。寧ろ自分は朱子の經と立てたものは序文で傳と見たものを本論と考へたいと思ふものである。即ち孝經全文はその内容上序論と本論の二つに區分せられ、本論の方は更に今文經の章名に従へば三才章第七、孝治章第八、聖治章第九を一國とし聖治章を中心にして孝の理論とその運用たる孝治への連絡を考へたもの、紀孝行章第十以下は常の場合、變の場合に當つて實際の孝の事實を説いたもので紀孝行章がその中心をなすものだと思ふのである。今孝の理論を説いた前三章に就いて考へると三才章の

「夫孝天之經也、地之義也、民之行也」とか、「先王見教之可以化民也云々」とか云ふのは孝は天地の道であり、従つて又人間の道でもあることを述べ、先世の聖王は人民に對して教化の可能を認め、此の天地の道に従ひ無理のない政を行つたから、その教が肅ならずとも成り、政令は嚴ならずして治平を致したわけであるといふのであつて、更に之を王諸侯卿大夫士庶人の各階級に當て夫々の身分に應じた孝治を細説したのが孝治章第八である。而も此の二章は孝論の概説であるが、一步論旨を進めて詳論したのが聖治章第九である。此章では前に先王が至德要道を以て天下を順にし民を和睦せしめ上下に怨なからしめたと序にあるが、その至德は德の本であり、教の源でもある。之を體し之を實現して行く所に治世の要道がある。此の至德は孝をいふのである。之は天經地義民行、即ち自然の道に合した人間の行である。

何故孝を人間の自然だといふのかといへば、先づ孝心の發生の事情を見ると幼孩の時から何人にもまして兩親の側に在つて片時も之を離れない。それ故に親しみの情愛が誰にも勝つて深い。而もその養育の下に成人して行く日々の發達の過程が最も近い父母によつて導かれるといふ事は自然先達としての父母、規範としての父母を感ずるわけである。正常な親子の關係の中から子の親に對する愛と敬とが生れることは自然なことで何等の不思議もない。自然界の事象が無爲にして行はれると一般である。之が聖治章の「親生之膝下、以養父母、日嚴」の意味であると思ふ。更に之を發生的、事實的にはなく理論的に「父子之道天性也」といふことはどうして云はれるかと云ふに「父母生之續莫大焉」である。此語は前の語と共に漢書藝文志に引かれて「諸家說不安處」といはれ古來問題の語句である。自分の考を以てすれば肉體上の親子の連續、即ち祖孫一體の考へ方は引いて親の遺體を行ふといふ考を必然喚び起し、茲に嚴肅な規制として我々の日常生活が律せられて行く力を生むものだと考へられる。我が身は、我が心は、我が行は、凡て親の殘されたもの、親と共に常在るもの、又従つて我が子のものでもであると考へられる時に人間の凡ての行爲が「孝行」になるといふことを自分は考へたのである。即ち「身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也」といつた意味は此に於ては簡単な語句ながら意味深く説かれてゐると思ふのである。之に續けて「君親臨之、厚莫重焉」とあるが親に對する尊敬

の念は以上のやうな發生過程を通つたものであるから愛の中に敬があり敬の中に愛があり敬愛の情に於てこれ以上の篤いものがないといふ意味だらうと思ふ。

孝が右の様に自然の情であり、自然に行はれるならば孝を説く必要なくして孝治が得られると直ぐにその裏面が考へられねばならぬが、之に就いては孝經では説かれて居らぬ。只正常の場合の孝の發生過程と孝の理論を説明してゐる丈である。孟子離婁に世俗の「所謂不孝者五」といつて頗る實情に即した不孝の目を擧げてゐるが、孟子には父母の遺體を行ふといふ考へは無かつたらしく、第四の目に「從耳目之欲、以爲父母戮、四不孝也」に幾分之と通ずるものを見るのである、がそれも前後の文からよく考へて見るとさうでないらしい、右の様な孝の考へは曾子獨特の思想らしく、孔子の言行にもその他の諸弟子の言行にもはつきり見えてゐない。

論語に曾子の臨終の時に吾が手を啓け吾が足を啓けといつたことや、禮記祭義に曾子の語として

身也者父母之遺體也、行父母之遺體、敢不敬乎云々

と見えてゐるのであるが、此思想の直接の後繼者は曾子の弟子では樂正子春であつて呂氏春秋孝行覽にその足を傷けて聲色あり樂まなかつたといはれる説話はそれを物語るものである。そして此の考へは後人によつてあまり發展されることなく諸家の説にも之を重視したものは殆んど見當らない。自分は此の理由から、孝經の此の思想に着目して孝經の編者として樂正子春を擬し得る一證と考へてゐる。それは兎も角孝經は朱子が幾ら連絡をつけようとしても經文の何れとも連絡のつかなかつた闡門諫争の章の如き經傳相蔽はぬものがあつたりして經傳を明かに別けることの無理が感ぜられ且つ内容上から全文の間に首尾一貫したものがあつて正に全文一經と見るべきものと思ふのである。

以上刊誤そのものは未定稿であり、従つて批判の餘地も多分に存することを述べたが、正義の成立によつて一先づ定本の大成された孝經の研究としては、全然從來とその目標意義を異にした此の刊誤の出現は、正に來るべくして來つたものとはいへ、研究史上の一時期を劃したもので、刊誤の功績の稱へらるべき大半は其の點に存すると思ふのである。